特集

「国際ユニヴァーサルデザイン協議会」活動紹介

Introduction to International Association for Universal Design

あらまし

日本では最近ユニバーサルデザイン（UD）をうたう商品が数多く発表・販売され，ビジネス的にも成功例が増えてきている。2002年12月には「国際ユニバーサルデザイン会議2002」がUDをテーマとする日本初の国際会議として開催された。2003年11月，この国際会議の理念と成果をもとに「国際ユニヴァーサルデザイン協議会（IAUD）」が発足した。IAUDには製造業だけでなく流通・サービス業まで，日本を代表する幅広い業種・業態の多くの企業が会員として参加している。IAUDはUDを啓発・プロモーションする団体というより，産官学を挙げた協力体制により，一業種・一企業では解決が困難であったUDの課題を共有し，具体的に実践する大きな力となることが期待されている。

本稿ではIAUDの設立に向けた経緯・活動概要とともに，最近開催されたUD国際会議“Designing for the 21st Century Ⅲ”を紹介し，最後に富士通の協議会へのかかわり方と新しいビジネスの創出など協議会の役割とビジネスへのインパクトや今後の活動への展望について述べる。

Abstract

In Japan, many products incorporating Universal Design (UD) have recently been marketed and successes with such products have been increasing. In December 2002, the International Conference for Universal Design in Japan 2002 was held in Japan, this being the first conference on UD to be held in our country. Based on ideas proposed at this conference and the conclusions drawn, the International Association for Universal Design (IAUD) was inaugurated in November 2003. Membership of the IAUD is not limited to manufacturing industries. Its many members span all representative Japanese industries from the distribution to the service industry. The IAUD will not just concern itself with educational programs related to UD and the promotion of UD, it is hoped that it will be an influential proactive organization which addresses complex UD problems that could not be solved by individual companies or industries, through cooperation between industry, government, and academia. This paper describes the history of the establishment of the IAUD, outlines its activities, and reports on Designing for the 21st Century III, a recently held international conference on UD. Also, this paper looks at Fujitsu's involvement in IAUD, the impact of IAUD on business and its role in the creation of new business opportunities, and gives an outlook for future activities.

蔦谷邦夫（つたたに　くにお）

総合デザインセンターデザイン企画部 所属
現在，デザイン戦略，デザイン保護，ブランディング，センターの広報・PRなどに関する業務に従事。

「国際ユニヴァーサルデザイン協議会」活動紹介

ま　え　が　き

様々な場面でユニバーサルデザイン（UD）への取組みが高まりを見せる中，産業界でも大きな動きがあった。2003年11月28日，UDの更なる普及と実現をとおして停滞する日本経済を再び活性化し，社会の健全な発展に貢献することを目的として「国際ユニヴァーサルデザイン協議会」（IAUD：International Association for Universal Design）が発足した。IAUDは，2002年に開催された「国際ユニバーサルデザイン会議2002」の理念と成果を踏まえて，継続的に情報の共有化と産官学の人的交流を行うことで，より高い水準のユニバーサルデザイン活動を進めている。またIAUDは，すべての人が本当に暮らしやすい社会を実現させるため，業種・業態を越えた横断的なプロジェクトを推進し，魅力ある製品やサービスを創出する活動を行っている。正式に活動を開始してから約1年が経過し，会員企業数は，発足当時109社であったのが，2004年10月現在135社と着実に増加してきている。2004年4月からテーマ研究，事業開発，活動成果の発信などを行う七つの委員会も本格的に活動を開始した。

富士通はこの協議会に対し，会員としてだけでなく，組織の発足に大きくかかわり，協議会の運営面でも山本名誉会長が会長を務めるほか，評議員会，理事会，委員会への参画など積極的に取り組んでいる。

なお，著者もIAUD設立からかかわり，現在は情報保障委員会の活動に参画している。

本稿ではIAUDの発足前後の経緯と，現在の活動状況，および最近開催されたUD国際会議“Designing for the 21st Century Ⅲ”を紹介し，最後に産業界においてIAUDの果たす役割と富士通のかかわり方について述べる[(1)-(4)]。

発端は「国際ユニバーサルデザイン会議2002」

本章では，IAUD発足のきっかけとなった「国際ユニバーサルデザイン会議2002」の開催経緯とこの会議がもたらしたものを紹介する。

2002年11月30日から12月4日まで，パシフィコ横浜で開催されたこの会議は，UDをテーマとする国際会議としては日本初で，1998年と2000年に米国で開催された会議に続くものである。

日本での国際会議は米国の国際会議に参加した5名のデザイナが発起人となり，寛仁（ともひと）親王殿下のお声掛かりによりスタートした。民間企業，デザイン関連団体の参加に加え，中央省庁・自治体やデザイン・UD関連団体，大学・教育機関の後援，協力も得て，名実ともに産官学を挙げたイベントとなった。

会議登録者は日本を含めた20箇国から693名（海外から87名），公開シンポジウム参加者が約750名，併設展示会への来場者は約3,200名であった。また，協賛企業が29社，賛助企業が4社と，多くの企業の協力を得たことがこの会議成功の大きな要因であり，この国際会議で参加者のユニバーサルデザインに対する共通認識ができたことがIAUDの発足のきっかけとなった。

IAUDの発足

2003年11月28日，発会式は行われた。

発会式では，報道関係者57名を含め325名の参加者を迎え，総裁である寛仁親王殿下からお言葉をいただいた。スキー用具メーカの健常者と同じようにスキーができる用具開発の話など，長きにわたりUDコンセプトでものづくりを続けてきた事例の紹介は，IAUDの今後の活動を勇気付け，その方向性を考える契機となるものであった。

発会式の後，記念パーティーにおける中川経済産業大臣，西室日本経団連副会長の両氏の祝辞では日本の産業のけん引力としてのUDに対する期待と，官民挙げて推進していく姿勢が述べられ，参加者からはIAUDの方向性に確信を得たという声も多く聞かれた。会場内では会員企業の経営者層の参加者も目立ち，UD推進の意志を確認される姿も多く見受けられた。また，海外ネットワークとして協力をお願いしているアドバイザ，教育機関，UD団体などから，IAUDへの期待を込めたメッセージが紹介された。

さらに，会場内では会員企業のUDへの取組みを紹介する34社のパネル展示と17社の商品展示も行われ，参加者にUDの盛り上がりを実感させた。

IAUDの活動コンセプト

本章では，UDの更なる普及と実現に向けたIAUDの活動コンセプトを紹介する。

IAUD会員企業の顔ぶれを見ると，電機，自動車，

住宅メーカ，情報機器といった製造業だけでなく，流通・サービス業まで含めた日本の産業界を代表する幅広い企業が参加していることが分かる。活動の基本はこの幅広い企業の参加を生かし，業種・業態を越えた情報共有・テーマ研究，事業開発を通じた実践，評価，そして情報発信まで，一貫してUDの視点で推進していくことである。また，そのプロセスにおいてはUDのコンセプトをもとにし，すべての活動で「生活者との対話」を重視し，生活者を機軸にした取組みにより，UDの普及と実現に向けて質的向上と高度化を目指した活動を行うこととしている。

IAUDの活動概要

IAUDの運営組織体制を**図**-1に示す。IAUDの運営は総裁・会長のもとに事業の執行を行う理事会と，理事会の提示した事業計画および予算の承認を行う評議員会で行われる。テーマ研究委員会，事業開発委員会など七つの委員会は，理事会のもとで実際の事業を推進する。

本章では，IAUDの具体的な事業を推進している七つの委員会の活動を紹介する。各委員会の概要と活動状況は以下のとおりである。

(1) テーマ研究委員会

IAUDの活動の基本となる「生活者との対話」を具体的に実現するための研究会を機軸として，定例研究会WG，理念研究WG，標準化検討WGの三つのWGで活動を展開する。

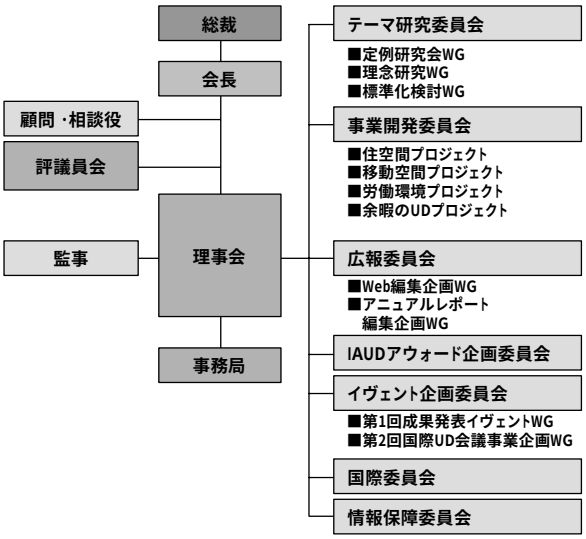

図-1 国際ユニヴァーサルデザイン協議会の運営組織体制
Fig.1-Organization of the International Association for Universal Design.

(2) 事業開発委員会

IAUDが様々な業種・業態の会員から成ることを生かし，会員同士の共同開発やビジネスモデル研究を進め，新たなビジネスチャンスを創出する基盤強化を図る。「快適で安心な生活」をキーワードに，現在は住空間，移動空間，労働環境，余暇のUDの四つのプロジェクトで活動を進めている。

(3) 広報委員会

IAUDの活動成果の発信，IAUDの存在価値を高めるための事業を担当する。IAUDの紹介パンフレット作成，Webサイトやアニュアルレポート，会報などをとおして広報活動を展開している。

(4) IAUDアウォード企画委員会

UD分野でのアウォード（賞）の設立を視野に，現在は基本評価基準の策定と，UDの評価認証制度発足に向けた基礎調査を進めている。

(5) イヴェント企画委員会

IAUDの成果発表会を主軸にUDの理解と活用の場の創設と提供を行う。現在は第1回成果発表イヴェントWGと，2006年日本での開催に向けた第2回国際UD会議事業企画WGを中心に活動を展開している。

(6) 国際委員会

日本発のUDを広く世界に発信していくための「場づくり」「人づくり」を基本に，国際交流のネットワークを形成するために活動する。海外コンサルタントの活用，国際会議への参加促進など会員の国際活動の支援を進める。

(7) 情報保障委員会

IAUDの関連するイベントにおいて，参加者への平等な情報提供の実現を活動の中心としている。現在は2006年の国際UD会議開催に向けた候補会場の評価や，イベントにおける情報保障のガイドライン化などを進めている。

IAUDの対外活動・イベントなど

IAUDは委員会など会員に閉じた活動だけでなく，公開セミナなど会員外の一般の方にもオープンに情報発信活動を行ってきた。今後の予定を含め，主な対外活動とイベントは以下のとおりである。

（1） 発会記念公開セミナ

2003年12月6日，東京の日産自動車（株）において，発足記念公開セミナが以下のとおり開催された。

・記念講演：ロジャー・コールマン氏（英国王立芸術大学院The Helen Hamlyn Research Centre所長）

・パネルディスカッション

・会員企業のパネル・商品展示

（2）今後の予定

今後，以下のイベントが予定されている。

・成果発表会

年度の活動成果を発表するイベントとして毎年度末（3月）に成果発表会の開催が予定されている。

・国際ユニヴァーサルデザイン会議2006（仮称）

IAUD設立のきっかけとなった2002年の国際UD会議に続いて日本において2回目の国際会議が2006年10月，京都市において開催が予定されている。

UD国際会議“Designing for the 21st Century Ⅲ”

本章では，UDを国際間の格差を少なくする社会的平等ツールとして，その理解を深めることを目的として最近開催されたUD国際会議“Designing for the 21st Century Ⅲ”の状況を紹介する。

この国際会議は，米国のUD推進団体であるアダプティブ・エンバイラメンツセンター（Adaptive Environments Center，以下AE）が主催し，ブラジル・リオデジャネイロで2004年12月7日から11日の5日間にわたり開催された。会議参加者は425名，同団体としては1998年，2000年に続き3回目の国際会議となる。

（1） 開会式

7日，8日のプレコンファレンスに引き続き，9日の開会式では戸田評議員会議長から，総裁である寛仁親王殿下のお祝いのメッセージが披露された。この内容は英語，ポルトガル語，スペイン語の3箇国語に同時通訳され，また手話でも3箇国語で伝えられた。

（2） IAUDセッション

10日の午後にはIAUDとしてのセッションが開催され，戸田議長の基調講演と会員企業6社7名から成果発表が行われた。基調講演では，日本のものづくりは古来UDに通じる思想を持っていたこと，IAUDの設立過程と意義，現在の活動状況について紹介された。成果発表では日本企業でのUDの実践の様子を人，開発プロセス，製品の三つの局面でとらえ発表された。富士通からもWebアクセシビリティに関する取組みが紹介された。セッションの最後には2006年に京都で開催予定の国際会議の予告が行われた。

（3） 展示コーナ

会期中，会場の一角を利用して展示コーナが設けられ，IAUDブースでは，IAUDの活動紹介と会員企業9社による製品展示やUDへの取組みなどが紹介された。富士通もセッションで紹介したWebアクセシビリティに関するツールの展示デモを行った。IAUDのほかにもAEなど数団体の展示ブースがあったが，具体的な工業製品の展示はほとんど見られず，IAUDの展示内容はIAUDセッションの内容とともに，日本の取組みの傾向を示す特徴的な場面だったと言える（**図**-2）。

（4） ロン・メイス賞受賞

この国際会議において2000年に続き第2回目となるロン・メイス賞の授賞式が行われ，IAUDの活動に対し同賞が贈られた。ロン・メイス賞は，UDに功績のあった人および団体へ授与されるもので，今回は9箇国から20件が表彰された。このことは，セッションや展示をとおし，日本におけるUDの取組みや成果が，具体的な製品，サービスという形で強くアピールできただけでなく，IAUDがそのけん引役として大きな働きをしてきたことが高く評価され，国際的な場で認められたと言える。

図-2 UD国際会議“Designing for the 21st Century Ⅲ”における国際ユニヴァーサルデザイン協議会の展示コーナ

Fig.2-Exhibition corner at Designing for the 21st Century III.

IAUDの役割と富士通のかかわり方

本章では，UDの更なる普及と実現を目指して，社会貢献していくことが期待されているIAUDの役割と，富士通のかかわり方について述べる。

IAUDの役割としてはUDの啓発やプロモーション以上に，UDに関連する具体的な事業開発や共同研究を強力に推し進めることが期待されている。とくに，業種・業態を越えた横断的プロジェクトによる新しいビジネスの創出についてはIAUDならではの可能性として大いに期待される。異分野の規格標準化やユーザを幅広くとらえ製品開発に生かす仕組みづくりなど，多数あるUDの課題は一業種・一企業，さらには民間だけでは解決できないものも多い。IAUDは多くの専門家をアドバイザとして連携しており，またIAUDは関連省庁や自治体，UD関連団体などとの連携にも積極的に取り組んでいる。産官学を挙げた協力体制によって，これまで困難であった課題を解決していくことが期待される。これらの課題の解決はまた生産の空洞化が問題視される日本の産業を活性化し新しいパラダイムへのけん引力のかぎとなり，世界経済への貢献につながるだけでなく，世界の人々の生活をより豊かで楽しいものにしていく可能性を秘めている。

富士通は冒頭に述べたように，2002年の国際UD会議から始まり，IAUDの設立・運営に大きく貢献してきた。具体的には富士通の山本名誉会長の会長拝命をはじめとして，評議員として長野経営執行役，理事として加藤総合デザインセンター長が参画しているほか，現在，三つの委員会に参画している。また富士通はUDに対し，この特集で紹介されている事例を含め，「富士通ウェブ・アクセシビリティ指針」をはじめとする情報発信，グループ会社内の啓発や教育の推進，就業環境の改善など，様々な視点から取組みを進めてきた。

富士通は，今後もIAUDの運営，委員会の活動に貢献するとともに，一人でも多くの人が豊かで快適な生活を送れるように，IAUDの成果を迅速に富士通の製品・サービスに生かしていくことに取り組んでいきたい。

む　す　び

本稿では，富士通のIAUDへの貢献も含めて，IAUDの発足，活動コンセプト，現在の活動状況および今後期待される役割を紹介した。

IAUDは発足して1年あまりが経過したが，組織としての活動体制や成果のレベルはまだまだ十分とは言えず，その真価を発揮するにはこれからの努力にかかるところが大きい。現在，そのためにIAUDにかかわる多くの企業・団体・個人がIAUDの発展のために真剣に取り組んでいる。

富士通はその一翼を担い，IT企業のリーディングカンパニーとして，IAUDに強力な支援をするとともに，製品・サービスを通じて，UDの更なる普及に努めていきたい。このことは今後の富士通にとって，経営資源の一つとして具体的なビジネスにメリットをもたらすばかりでなく，富士通が目指す「サステナブルカンパニー」にもつながるものと考えている。

参 考 文 献

(1)　国際ユニバーサルデザイン会議2002実行委員会：国際ユニバーサルデザイン会議2002報告．2003年3月．
(2)　国際ユニヴァーサルデザイン協議会広報委員会：IAUD会報創刊準備号．2004年3月．
(3)　国際ユニバーサルデザイン会議2002公式サイト．http://www.iaud.net/ud2002/jp/
(4)　国際ユニヴァーサルデザイン協議会公式サイト．http://www.iaud.net/index.html